書　評

鈴木貴宇 著

『〈サラリーマン〉の文化史
―あるいは「家族」と「安定」の近現代史―』

伊藤　博之

大阪経済大学教授

(1)　はじめに

「会社勤め・転勤族」の家庭で育った評者にとって，「サラリーマン」なる言葉は物心つく頃から身近な存在だった。会社からの辞令一つで2〜3年間隔の転校を強いられたことや狭い社宅の記憶と結びつき，サラリーマンという言葉には複雑な思いを持ち続けてきた。サラリーマンの家庭に生まれたことは，間違いなく，評者の人生や人格に少なからぬ影響を与えたと言える。

サラリーマンという言葉の背景には，評者が感じたように，それに関わる人々の生活や人生を規定する何かがある。一方で，それを「ホワイトカラー」等の学術的に使用可能な概念に置き換えてしまうと，その「何か」は失われてしまう。結果，サラリーマンという言葉は，その中身が不可視のブラックボックスとして世間に流通するままになってきた。

本書は，こうした知の空白を埋める，サラリーマン表象から見る日本社会論である。文学作品を中心とする文化表象（新聞・雑誌記事，小説，映画，広告，写真等も含む）から，サラリーマンがなぜどのように表象されてきたのか，また，その表象に対峙する人びとの生のあり方の解釈が提示される。

以下，本書の構成を要約した後，評者の評価を述べることとする。

(2)　本書の構成

「はじめに」は，著者が古書店で入手した無名サラリーマンが作成したスクラップブックの記述から始まり，サラリーマンというありきたりの存在の不思議さに筆を進めつつ，本書の目的が以下のように要約される（18頁）。

> 「サラリーマンとは職層というよりはむしろ「安定志向」や「凡庸さ」といった価値観の総称である。だが，なぜそうした価値観を彼らの表象が内包するに至ったかを解明する作業は決して単純なものではない。そのためにはまず，彼らが働く会社組織の出現までさかのぼり，近代日本社会が資本主義経済化をどのように経験したのかをたどらなければならない。」

序章「〈サラリーマン〉をめぐる言説―あるいは，彼らはどこから来たのか」では，問題の所在，先行研究，方法論（研究アプローチ），本書の構成が概説される。また，「サラリーマンとは企業に勤務する人々を指し，公務員は除く」（28頁）と緩やかに定義される。

第1章「〈サラリーマン〉前史としての一八七〇年代から一九一〇年代―士族，立身出世主義，そして煩悩青年」では，サラリーマン登場以前の明治時代における官吏と実業家が分析対象とされる。野心を抱き故郷を捨て東京に移動することで帰属先を喪失した穴埋めに，家庭を中心に据えた成功のエートスとしての「立身出

世主義」と，そこから脱落する現実の可能性が示される。こうした文脈で，「学歴」と「洋装」は，官吏の表象として象徴的な意義を持つことになる。分析の素材である表象としては，二葉亭四迷著『浮雲』等が取り上げられる。

第2章「ベル・エポックあるいは小市民のユートピア―「文化住宅」という装置と大正時代のサラリーマン」では，日清・日露戦争を経て資本主義の発展期となった1910年代から20年代に企業勃興が進み，サラリーマンが社会的に認知され始めた時代が議論の対象となる。この時代，「郊外の文化住宅から丸の内の会社へスーツ姿で出勤する」というサラリーマンのモデルが登場する。一方，そうしたモデルに沿った，婦人雑誌や新聞・広告が称揚する文化住宅に象徴される近代家族の規範と現実の生活との不可避のギャップが描かれる。

第3章「蒼白きインテリたち―モダンボーイ，マルクスボーイ，サラリーマン」では，1920年代半ばから30年代半ばの関東大震災から日中戦争に続く「昭和モダニズム（エロ・グロ・ナンセンス）」の時代が対象とされる。マルクス主義が影響力を持ったこの時代，労働運動に参加することなく都市消費文化の享楽に身を委ね，社会不安を直視することから逃避するサラリーマンの様子が，堀辰雄著『風立ちぬ』等の文化表象の解釈を通して描かれる。

第4章「戦後民主主義の恋愛―敗戦後のサラリーマンたち」は，1945年から50年代初頭の敗戦から民主化の時代を論じる。この章では，テレビドラマの『君の名は』や源氏鶏太著『三等重役』が取り上げられ，そこで描かれた恋愛のかたちや物語のプロットの解釈から，戦後の民主化の進展を背景に，「サラリーマンの夫と専業主婦と子供たち」からなる核家族の標準世帯という価値観の登場の様相が読み解かれる。

第5章「家庭と組合のはざまで―銀行の労組活動と文化運動」では，戦後復興期の1950年代が対象とされる。混乱する世相を背景に社会改革の可能性が模索されたこの時代，企業と一体化しないサラリーマンの生き方があった。また，この時期には，兵役に召集された男性の労働力を補うべく戦時中に雇用された多数の女性ホワイトカラー労働者がいた。そうした状況の解釈が銀行労組の機関紙の読解を通して導かれる。こうした背景で，サラリーマンが最も個人としての自己の側面を打ち出すことができたのが1950年代初頭とされる。

終章「漂泊への決別，あるいは「平凡なサラリーマン」として生きることの覚悟―山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』論」では，1960年代の高度経済成長期の戦中派（戦時中に青年期にあった戦争を知る世代）が注目される。彼らは，敗戦の記憶を括弧に入れつつ，子供と家庭に安定を与えることを目指し，自身の閉塞感に眼を瞑るマイホーム主義に象徴される私生活中心主義に向かう傾向があった。副題にある山口瞳の小説，カルピスの広告，流行歌（「遠くへ行きたい」），テレビのホーム・ドラマ，社宅生活等が分析対象とされる。また，これまでの考察を踏まえて，1970年代以降のサラリーマンについての洞察も提示される。

(3) 本書の特徴と評価

著者の専攻は日本近代文学，日本モダニズム研究，戦後日本社会論であり，当該領域の知見を欠く評者の論評には的外れなものが多いと思われる。一方，こうした領域に無縁な一読者であっても，本書からは学ぶ点や考えさせられる点が多かった。以下，それらは相互に関連するが，3点を列記する。

第一に，サラリーマンという日常的存在がブラックボックスとなっていることを意識にのぼらせることがある。サラリーマンをめぐる表象が，ある時代まで日本社会のあり方を大きく規定してきたことは直観的に受け入れられるのではなかろうか。その一方で，サラリーマンなる言葉の固有性についての学術的検討はほとんど行われてこなかった。評者自身ひっかかりを感じながらもそうした考察を先送りしてきたこと

を，本書を読んで今更ながら意識することとなった。

第二に，文化表象の解釈というアプローチを採用することで，経営学者には思いの及びにくい独自のサラリーマン解釈を提示している点である。本書のアプローチは，サラリーマンに関する生き方の構造に迫る点に特長がある。そうしたアプローチによることで，サラリーマンとは，個として生きる要求と集団の規範に従う葛藤に晒される存在であり，そこに悲喜織り交ぜた人生が繰り広げられ，また，それが日本の資本主義の構造を形作ってきたことが初めて説得的に示されうる。日本的経営の本質は，「ライフタイム・コミットメント」と表現される個人の組織への全人格的関与とされるが，本書のサラリーマン像はそうした理解を深化させるものである。

第三に，本書の採用する文化史という視点が，評者の観点からは「サラリーマンの考古学」と了解できる点である。本書は，現在の視点から歴史をさかのぼり，サラリーマン像を単線的な発展過程へ再構成してしまう罠を回避している。こうした罠に陥ると，本来，人々の経験からなる現象として存在する生活世界を市場，労働者，組織等といった抽象的概念から組み立てられる「理論」に置き換えてしまう。しかし実際には，時代ごとに異なるコンテクストが存在し，歴史の流れは連続的でない。一方，理論は，現実世界の一面を映し出すに過ぎず，その時代の生活の実相に迫るその能力には限界がある。こうした陥穽を回避するためには，考古学者が地面を掘り起こし，各地層の埋葬物・沈殿物を発掘・分析するように，各時代のドキュメントを収集しそれらを歴史の地層のようにして解釈することが唯一の方法となろう。それによって，現在の視点や理論から歴史を再構成する罠を避けることが初めて可能となる。その時代に生きた人々の精神構造やその背景にある社会構造に接近するには，タイムマシンがない以上，それ以外の方法は存在しない。また，サラリーマンという日常世界に根づいた不思議な存在の解釈には，こうした方法こそふさわしい。本書は，こうした思考方法を教えてくれる点でも有意義である。

(4) 最後に

以上の他にも，本書から様々な洞察が引き出されうる。日本的経営論に関心がある読者であれば，それぞれの視点から斬新な発想や新たな問いを本書から引き出すことが可能である。それらは，著者に解答を求めるものというよりも，触発された読者自身に対する問いとなろう。評者であれば，「安定と家庭に回帰するサラリーマン表象が 1980 年代以降の日本企業の経営にどのような制約を課したのか」，「新自由主義や投資家資本主義というグローバルな政治プログラムの中でサラリーマンはどのような変質を遂げたのか」，「サラリーマンにかわる現代の文化表象（たとえば，企業家）はどのようなものか」といった問いが触発される。

結局，著者も指摘するように，サラリーマンという言葉は，1980 年代以降，日本社会の同質性を照らし出す表象ではなくなりつつある。しかし，サラリーマンの来し方を理解することは重要である。サラリーマンというロマンチックでない言葉の不思議さに気づかされることで，日常世界の深みや複雑さに改めて目がひらかれることであろう。

（青弓社，2022 年 8 月，471 頁，4,000 円＋税）